

□初動期における災害対策について

兵庫県北淡町長 小久保 正 雄

わが町は不幸中の幸い、というべきか、1月17日の夜には、死亡者数と行方不明者(一人もなし)が確認され、倒壊家屋の下敷きになった300名近い住民も、地元消防団員や隣人たち、そしていち早くかけつけてくれた自衛隊員や警察官、広域消防署員たちの懸命の働きによって、全て無事に救出された。

従って1月18日の午後三時には、町主催で犠牲者38人の合同葬儀を取り行うことが出来たのである。

一方、全・半壊家屋が2,200戸に及び、

多数の町民が不自由な避難所生活を余儀なくされていたが、1月31日には天皇陛下のご慰問に接し、一同大いに勇気づけられた(写真1)。

そして想像を絶する惨状を目のあたりにして、私はガレキとなった膨大な量の倒壊家屋の早期撤去は、自衛隊に頼る他ないとハラを決めた。

もちろん彼等は、道路等に倒壊したガレキの撤去、給水、給食、入浴等の作業やサービスはよくやってくれていた。それらは、災害出動した自衛隊の任務として正当に認められていた。

しかし、倒壊した民家のガレキの撤去は、これまでに例の無いことであった。

私は、日を追って視察調査に訪れた第3師団長、陸幕長、統合幕僚長等の最高幹部にこのことをお願いしつづけた。

しかし彼等の返事は異口同音に「町長さん、この惨状を見れば、私たちも出来るだけのことをしたいと思う。しかし、これは私共制服組ではどうすること

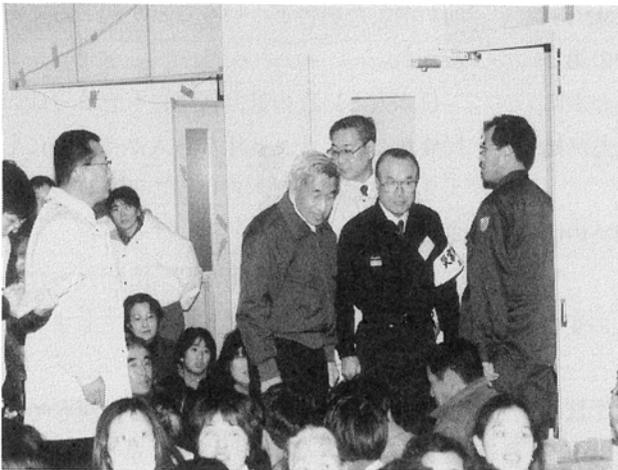


写真1 避難者を慰問される天皇陛下(町民センター)

も出来ない。政治の問題です。」
というものであった。

「村山さんが OK と言えばいいのですか。」と尋ねると、「その通りです。」とのこと。

そこで私は、制服組の方に無理をいうのをやめて、その当時、2 日に 1 回の割合で視察に訪れていた各省大臣や次官、国会議員等に、何とかしてくれるようくりかえし頼みこんだ。亀井静香運輸大臣などは、町長室の電話で私の目の前で防衛庁長官に、「何とかしてやってくれ。」と頼んでくれた。

そのような、私の必死の陳情が功を奏したのかどうかは知らないが、政府内部でもいろいろと話し合いがあったようで、やがて、明確な方針を発表する、というわけにはいかないが、要するに被災地の首長と出動している自衛隊の責任者がよく話し合いをして、最上と思われる方法でやってもらいたい、というお達しがあったのである。

私は、これを日本の伝統的便法主義的解決方法と勝手に解釈し、四国善通寺の第2混成団長との間で覚え書を交わし、わが町では 2 月 6 日から民家ガレキの撤去が始まったのであった。

その次は、このたびの地震は、初めの頃「兵庫県南部地震」と呼ばれていた。

今もこれが正式の名称であることに変わりはない。

ところがしばらくすると、マスコミは一斉に「阪神大震災」または「関西大震災」と呼び始めた。



写真2 野島断層を調査する筆者

私は「これはえらいことになった。」と思い、不吉な予感さえ感じた。

こんどの大地震は、淡路島とくに北淡町の町はずれを震源地として起きた、といわれている。

事実私たちの町は、被災率において阪神地区を上まわる壊滅的な打撃を受けているのである。野島活断層も出現している(写真2)。

この地震の呼び名から「淡路」という名前が消えた場合どういうことが起こるであろうか。

日本人というのは、何事にも忘れっぽい民族だ。ここ 2, 3 年なら人々は淡路にも大きな被害がでた、ということを知っているだろう。

しかし、これが 5 年たち、10 年たったらどうなるか。きれいに忘れられてしまうだろう。

「震源地の町」などというのは決してプラス・イメージではない。しかし、忘れられてしまえば、これから政府が打ち出してくるであろう復旧・復興のためのいろいろな

施策の対象地から除外される恐れだつて出て来るのではないか。私は傑然とした。

これは絶対に「淡路」を入れさすべしだ!!

たまたまタクシーの中でラジオを聴いていたら、出演していた阪大の教授も同じ意味のことを述べていた。

この日に県庁で行われた県下の災害対策本部長会議(被災地の市長・町長、兵庫県で構成)で私はこの問題を取り上げ、政府の現地対策本部長や県知事に強く訴えた。

貝原知事は、早速、翌日から県の公式文書その他においては「阪神淡路大震災」と改めてくれた。

一方国に対しては、視察や調査に次々と本町を訪れていた大臣や国会議員、政府要人にこのことを訴えつづけた。その中で、野中自治大臣にもお願いしてあったところ、10日程経って、消防庁の総務課長さんから私あてに電話が入り、「大臣からの伝言です。明日の閣議で「阪神淡路大震災」という名称に政府関係のものは統一することに決定しました。」という朗報がもたらされた。

かくしてこの地震は「阪神淡路大震災」と呼ばれるようになった。それから半年間の経過を見るにつけ、淡路を入れておいてもらってよかった。正解であった、と思いがたることが実に多い。お力添えをいただいた関係者の方々に心から御礼を申し上げたい。

第三は、1月17日から始まった災害対策活動の中で、私はつねに役場の職員や消防団員に対して、「こんな悲惨な状態の中で仕事をするんだから、せめて仕事をする人間は皆な明るくやろう。時にはダジャレでも飛ばせよ。」と言いつづけたことである。

今まで誰もが体験したことのない大災害

である。一般住民はショックで虚脱状態となっており、彼等の世話をする立場にある役場職員や消防団員達もみな被災者である。

恐れ、ショック、緊張、疲労などが重なってムードが暗くなりがちであったが、私は努めて明るく快活に振る舞い、「明るく行こうぜ。」と皆に言いつづけた。そして深夜になって災害対策本部に残っている人の数も少なくなった時、私は若い職員に命じて全壊した役場近くの私の家から日本酒を取ってこさせた。

昨年10月の町長選挙勝利のお祝いに貰った酒が沢山残っていたのだ。その冷酒を幹部や若い職員とダジャレを飛ばしながら飲みかっ語り合ったものであった。

職員の間からは、「地震が来てから役場の中のコミュニケーションがずいぶんよくなった。」という声もたびたび聞いた。

また、その頃ずっと役場で陣取っていたマスコミの人達や、いつも出入りしていたボランティアや自衛隊の人達からも「北淡町の役場は活気がありますね。」とよく言われた。

おかげで、今日の疲労(心身共の)を明日へ持ち越すことを少なくし、あの地獄の底のような状況の中で、明るさを失わず、元気に住民のために働くことが出来た、と思っている。